

<p><b>8月30日</b> <b>(日)</b></p> <p>詩編 23編</p>	<p>「主は羊飼いです。わたしには何も欠けることがない。主はわたしを青草の原に休ませ／憩いの水のほとりに伴い、生き返らせてくださる」(2-3節)。酷暑の夏、肉体にとって水分補給が不可欠なように、たましいにとっては主からいただく「憩いの水」が欠かせない。たましいの脱水症状にならないように、真の羊飼いである主から今日も「憩いの水」をいただこう。</p>
<p><b>31日</b> <b>(月)</b></p> <p>詩編 24編</p>	<p>「城門よ、頭を上げよ／とこしえの門よ、身を起こせ。栄光に輝く王が来られる」(7節)。その昔、「主の契約の箱」をペリシテ人から奪還してエルサレムに入場する時に人びとがささげた賛美。「主の契約」とは、世界で最も貧しく小さなイスラエルの民を選び、慈しむ約束。その約束は、いかなる武力や脅しによっても揺らぐことがない。</p>
<p><b>9月1日</b> <b>(火)</b></p> <p>詩編 25編</p>	<p>「主よ、あなたの道をわたしに示し、あなたに従う道を教えてください」(4節)、「わたしは貧しく、孤独です。悩む心を解き放ち／痛みからわたしを引き出してください」(16-17節)。詩人は敵に囲まれ孤独な戦いを強いられている。私たちを心の痛みから解き放つのは、主なる神に従う道。敵との戦いではなく、主なる神に従う戦いが、私たちを解放に導く。</p>
<p><b>2日</b> <b>(水)</b></p> <p>詩編 26編</p>	<p>「わたしの足はまっすぐな道に立っています。聖歌隊と共にわたしは主をたたえます」(12節)。この詩人が「完全な道」(1、11節)と語っているのは、「あっちの神、こっちの神と二股をかけ、都合の良い時だけ主を礼拝する信仰」ではなく、ただひたすら主に従う信仰の意味。私たちがささげる賛美は「ひたすら主に従う賛美」になっているだろうか。</p>

<p><b>3日 (木)</b></p> <p>詩編 27編</p>	<p>「ひとつのことを主に願ひ、それだけを求めよう。命のある限り、主の家に宿り／主を仰ぎ望んで喜びを得、その宮で朝を迎えることを」(4節)。「一つのこと」を主に願うとしたらどんなことを祈るだろうか。「主と共に歩み、主を礼拝することだけを求める」とうたう詩人の心には、恐れではなく平安が満たされている。「求めるべき一つ」を今日間違えることのないように。</p>
<p><b>4日 (金)</b></p> <p>詩編 28章</p>	<p>「主をたたえよ。嘆き祈るわたしの声を聞いてくださいました…主の助けを得てわたしの心は喜び踊ります。歌をささげて感謝いたします」(6、7節)。主への祈りにおいて、私たちは嘆いていいし、叫んでいいし、涙していい。うれしい時には喜び踊って、歌をささげることもいい。取りつくり、格好つけることなく、主と共に歩む幸いを味わう一日となるように。</p>
<p><b>5日 (土)</b></p> <p>詩編 29編</p>	<p>「主の御声は水の上に響く」(3節)、「主の御声は力をもって響き／主の御声は輝きをもって響く」(4節)。主の御声が響く時、そこに命が生まれ、出会いが起こされ、新しい創造が始まっていく。主の御声には命がある。主の声に背を向け、聴こうとしない鈍さの中にいつまでも沈むことのないよう、主の御声に共鳴する、静かな共鳴板を心の中にいただくことができるよう</p>
<p><b>6日 (日)</b></p> <p>詩編 30編</p>	<p>「泣きながら夜を過ごす人にも／喜びの歌と共に朝を迎えさせてくださる」(6節)。賛美を与えてくださる神は、暗闇の中を歩むときも、必ず希望の朝を与えてくださる。困難が目の前にあるときには、神不在だと感じる。「なぜ、怖がるのか」と語りかけ、共にいて下さるイエス・キリストが伴っておられることを心に留めて、賛美の歌をささげるわたしたちとされて。</p>